

歌集『あかね雲』より（十）

登美子

暖かき日向の石に猫眠り

我も似ている心地よき苦情

五位鷺の声を教えし父哀し

その声今し屋根を過ぎゆく

泣く時も笑う時も傍にいた

何があつても支えてくれた

きつくとも自分に負けず走ろうと

心に決めてスタートを切る

宮裏の太き櫂も南向き

伊吹おろしを背にやり過ごす

千羽の鶴折り上げぬ間に逝きし友

我が手の不器用詫びて拝みぬ

二人居の布団干しおれば

隣家に色とりどりの児の服干しあり

蒲公英の綿毛飛ばせし児の

欠伸移りてわれも眠気さしおり

紋付の父の背中に背負われし子

役者髷傾け居眠りており

待ち合に同病の人と気が合いて

見知らぬ人と飽かず話しぬ

日赤に入りて貰う七つ道具

奉公袋の様に思えり

去年の思いで懐かし藍色の

セーター着込みて多賀に参らむ

暖冬にそなえて黒豆炊く時期を

一日遅らせ試みてみる